

入来遺跡調査概要

—支石墓研究の一環として—

河 口 貞 徳 編



1. 入来遺跡 2. 白寿遺跡 3. 石塚遺跡

第1図 遺跡周辺図

図 版 目 次

第1 遺跡遠景(上), Cトレンチ発掘状況(下)	168
第2 入来遺跡「大石」(上), 上石の除去の状況(下)	169
第3 「大石」除去後の状況(上), 「大石」下のたたき石, 凹石等の除後の状況(下)	170
第4 防火水槽南崖面にあらわれた土壌断面(上), Bトレンチ(土壌)発掘状況(下)	171

挿 図 目 次

第1 図 遺跡周辺図	132
第2 図 入来地形図	136~137
第3 図 入来遺跡周辺地形図とトレンチ配置図	141
第4 図 入来遺跡「大石」実測図	143
第5 図 入来遺跡Aトレンチ実測図	149~150
第6 図 入来遺跡Bトレンチ土壌図	157
第7 図 入来遺跡Bトレンチ道路側壁面土層図	156
第8 図 入来遺跡Cトレンチ平面及び断面図	160~161
第9 図 石塚子産石周辺図	162
第10 図 石塚子産石元位置周辺図	163
第11 図 石塚子産石元位置図	164
第12 図 石塚子産石元位置西壁地層図	165
第13 図 石塚子産石実測図	165
第14 図 「大石」下出土石器	145
第15 図 「大石」下出土石器	146
第16 図 「大石」下出土石器	147
第17 図 入来遺跡Aトレンチ出土土器実測図	152
第18 図 入来遺跡Aトレンチ出土土器石器実測図	155
第19 図 入来遺跡Aトレンチ出土須恵器拓影	153
第20 図 入来遺跡Aトレンチ出土琉球通宝拓影	152
第21 図 入来遺跡Bトレンチ土壌出土土器実測図	158
第22 図 入来遺跡Bトレンチ土壌出土土器実測図	159
第23 図 石塚遺跡子産石付近出土土器実測図	166

序

弥生時代の墓制の型式として支石墓の存在は、北九州においてはよく知られているところであるが、南九州、特に薩摩半島においてもドルメンと称されるものが存在し各地の口碑に残るものがあった。しかしこれらの巨石について見ると、その位置は山頂付近であり、多くの巨岩が露出したなかの一個である場合がほとんどで、人工と認められるものは皆無といってよい状態であった。したがって南九州においては支石墓は存在しないという考え方が一般的であった。

ところが20数年以来、薩摩半島西岸地域において吹上町入来や、金峰町高橋下小路、更に最近では吹上町下中、里白寿などに人為によると思われる巨石が集落内、或いは集落付近に存在すること知られるに至った。これらの巨石はいずれも沖積低地中の微高地に位置し、自然の巨石が存在する地域ではなく、また遺跡地付近にあって遺物の散布が見られるなど遺構としての条件が整っているところから支石墓とする考え方が行なわれるに至った。しかし乍らこれを確認する研究も行なわれないまま南九州における弥生時代の墓制全体が謎に包まれたままであった。

昭和50年度科学研究助成金による総合研究のテーマとして「東アジアにおける九州弥生時代墓制の研究」(岡崎敬)が選ばれたこの研究の一環として入来遺跡の調査が行なわれることになった。

調査は昭和51年8月に、研究分担者河川貞徳が発掘施行の責任者となり、九州大学助教授西谷正氏の指導を得、ラサール高校教諭上村俊雄・加世田女子高校教諭本田道輝両氏を調査員にお願いし、九州大学学生岩崎二郎・伊崎俊秋・宮内克己・鮫島・鹿児島大学学生旭慶男・多々良友博・平島勇夫・繁昌正幸・最所大輔・猿楽いづみ・別府大学学生吉留秀敏・北里大学学生三宅 仁の諸君の協力並びに加世田女子高校・加世田高校学生諸君の援助のもとに行なわれたものである。また調査にあたって地主川路家一族の方々の御助力によって便宜を得る所が多かった。併せて深く感謝の意を表する次第である。

昭和51年10月30日

河川貞徳

本文目次

I 序 説	138
1. 遺跡の環境	138
イ. 位置と地勢・地質	138
ロ. 文化環境	138
2. 遺跡の概観	139
イ. 現在までの調査	139
ロ. 遺跡の概観	139
3. 調査の経過	139
II 遺跡の調査	141
1. 遺跡総説	142
2. 入来遺跡西南区の調査	142
イ. 「大石」の調査	144
ロ. Aトレンチの調査	148
ハ. Bトレンチの調査	154
ニ. Cトレンチの調査	159
3. 石塚遺跡の調査	162
III む す び	166



1. 入来遺跡 2. 白寿遺跡 3. 石塚遺跡

第2図 入来地形図

一万分ノ一

I 序 説

1. 遺跡の環境

イ. 位置と地勢・地質

入来遺跡は薩摩半島西岸が弧状に内彎するところ、その中ほどの吹上砂丘内縁に位置する日置郡吹上町入来にある。

吹上砂丘は北方の串木野市戸崎鼻よりはじまり南端の野間半島基部まで延長4.0 Kmに達し、その内側には狭長な海岸平野が形成され、開林によって分断された低平なシラス台地と、沖積低地とが交錯している。入来遺跡はこれらのシラス台地の一つに立地している。

吹上町を貫流する伊作川が海に流入するあたりで、南側を並んで流れている小さな下戸川との間にはさまれた小台地が大字入来であり、伊作川の支流梨子川と下戸川の支流によって東を限られて、その形はほぼ長方形をなし、最高地点3.5 m、一般には標高2.0 mの小台地となっている。

大字入来は台地西端に立地し海に面する入来浜部落と、台地東端に立地する入来部落とに分かれ両部落の間には畑が広がっている。遺跡は入来部落に属し、台地の東端が水田へ舌状に突き出した部分である。

入来台地は北東が高く南西へ緩傾斜をもって下っている中で西端の入来浜部落の標高3.5 m地点を中心とする地域がわずかに崛起した状態となっているが、このあたりは砂丘によって形成されたものである。入来浜部落の東端より以東は黒褐色の火山灰層で被覆され、その下には厚いシラス層の堆積が見られ、更にシラス層の下には砂岩層が基盤をなしている。台地北端の伊作川によって浸食された立岩橋付近にはこの砂岩層の露頭が見られるのである。

ロ. 文化環境

薩摩半島西岸の海岸平野には縄文時代晩期以降弥生時代に至る遺跡が多く分布している。縄文時代晩期の遺跡では加世田市上加世田、全垂門、全花敷之原、金峰町天神原、全掘川、全高橋、吹上町塩水流、全上草田の11遺跡があり、そのうち高橋、塩水流、北湯之元、今田A、上草田の5遺跡は夜白式土器を出土している。

次に弥生時代前期の遺跡についてみると、松元町東昌寺、吹上町黒川、全小野、全今田B、金峰町高橋などがあり縄文時代晩期より弥生時代前期へかけての遺跡数が他の地域に比較して多く、集中度が高い。特に高橋は夜白式土器と高橋Ⅰ式土器を共伴する遺跡として知られている。

上記の遺跡分布状況は、薩摩半島西岸の入来遺跡周辺地域に弥生文化発生の基盤があったことを示していると同時に高橋を起点として弥生文化がこの地域に広がっていったことを示している。

薩摩半島西岸地域に伝播した弥生文化は前期を経て中期に至り始めて地域的特色を発揮するに

至った。それが入来遺跡であった。

2. 遺跡の概観

イ. 現在までの調査

第一次調査 昭和44年7月12日より昭和45年7月17日まで、調査日数94日、調査人員54名、調査延人数322人、調査面積314.8 m^2 、調査責任者河口貞徳。遺跡の北東地区の調査が行なわれた。

この調査で弥生時代中期初頭のV字溝、U字溝、貯蔵穴と、弥生時代終末期の住居址群が検出された。

第二次調査 昭和50年4月1日より4月5日まで、調査日数5日、調査人員9名、調査延人数27人、調査面積4.9 m^2 、調査責任者河口貞徳。遺跡地の西南地区の調査が行なわれた。この調査によって溝状遺構が検出された。

第一次の調査が行なわれた東北地区は土砂の採掘工事によって削平され、現在は旧地表より約15 m 切り下げられて、この部分の遺構は完全に消滅している。

ロ. 遺跡の概観

入来遺跡は弥生時代中期の集落と墓域から成り、更に上層には弥生時代終末期の集落が重なった複合遺跡である。

遺跡の立地する入来台地の舌状凸出部は標高20 m 、最高点22 m で周辺の水田地帯よりの比高は15 m である。台地上は平坦で畑作に利用され、南側斜面は削られて宅地となっている。

遺跡の広がりや舌状台地の上面より南斜面に及び、台地東端より西方へ250 m 、東端では幅100 m 、西端では幅150 m の範囲で面積は約3100 m^2 である。

遺跡地の東半の台地面は弥生時代中期前葉の遺構、南側傾斜面は中期中葉の遺構、特に西南地区は墓域の存在が推定され、これらの中期の遺跡の上に弥生時代終末期の遺跡が重なり、更に広い範囲に分布したものである。

石塚遺跡は入来台地の東南端が下戸川の支流によって切断された部分に立地している。「子産石」と称される巨石があり、周辺は弥生時代終末期の遺物散布地である。

3. 調査の経過

調査は入来遺跡西南地区の「大石」所在地を中心とする地域と、これより東南方向400 m の地点にある石塚遺跡の「子産石」所在地について行なった。

入来遺跡の調査は「大石」地点と、「大石」の東側A地点、「大石」の南側B地点(土墳),「大石」の北側台地上C地点の4地点について,また石塚遺跡の調査は「子産石」の元所在地点について実施した。調査期日は昭和51年3月23日より全月31日に至る9日間である。

調査分担

総括 河口貞徳

西谷 正

入来遺跡西南地区

「大石」地点 担当

◦ 岩崎二郎・旭 慶男・最所大輔

A地点 担当

◦ 繁昌正幸・吉留秀敏

B地点 担当

◦ 多々良友博・宮内克己・鯨島

C地点 担当

◦ 本田道輝

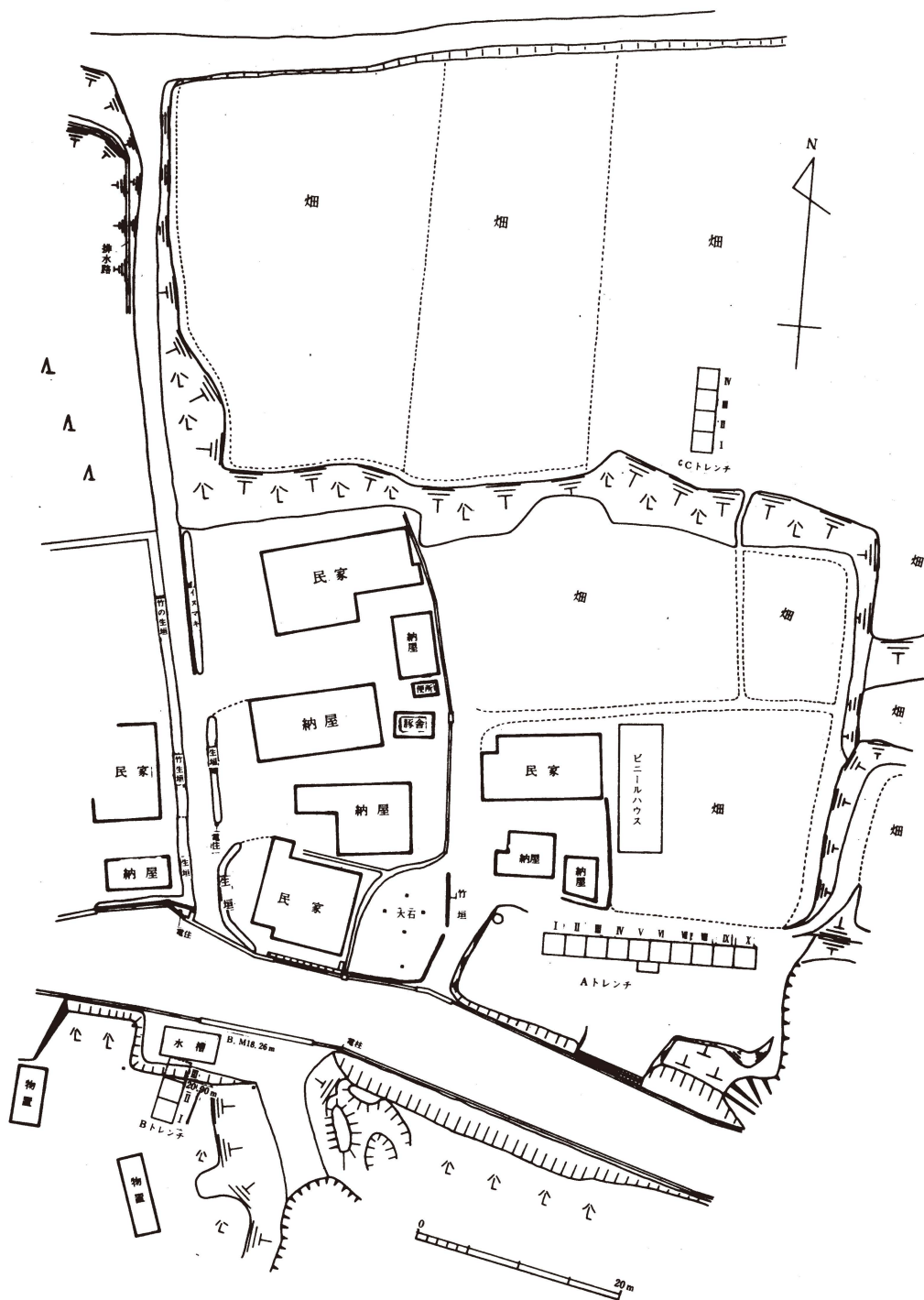
石塚遺跡

子産石の元所在地点 担当

◦ 上村俊雄・平島勇夫・伊崎俊秋・猿楽いづみ・三宅 仁

◦ は分担責任者

Ⅱ 遺跡の調査



第3図 入来遺跡周辺地形図とトレンチ配置図

1. 遺跡総説 (第3図・第9図・第10図)

入来遺跡西南地区は舌状に張り出した台地の南側基部に当たり、遺跡に沿って南吹上駅に通ずる道路が切り通しとなって台地へ登る地点付近である。

調査の対象となった「大石」は切り通しの北側宅地内にあり、二拾数年前にこの切り通し工事が行なわれた際には、「大石」の位置から道路をへだてた崖上に平らな大石があり、大石下の崖面には黒土のつまった土壌の切断面が明瞭に出現していたのである。昭和50年の道路拡張工事によって前記の大石は除去され道路の埋石となり、土壌も消滅した。

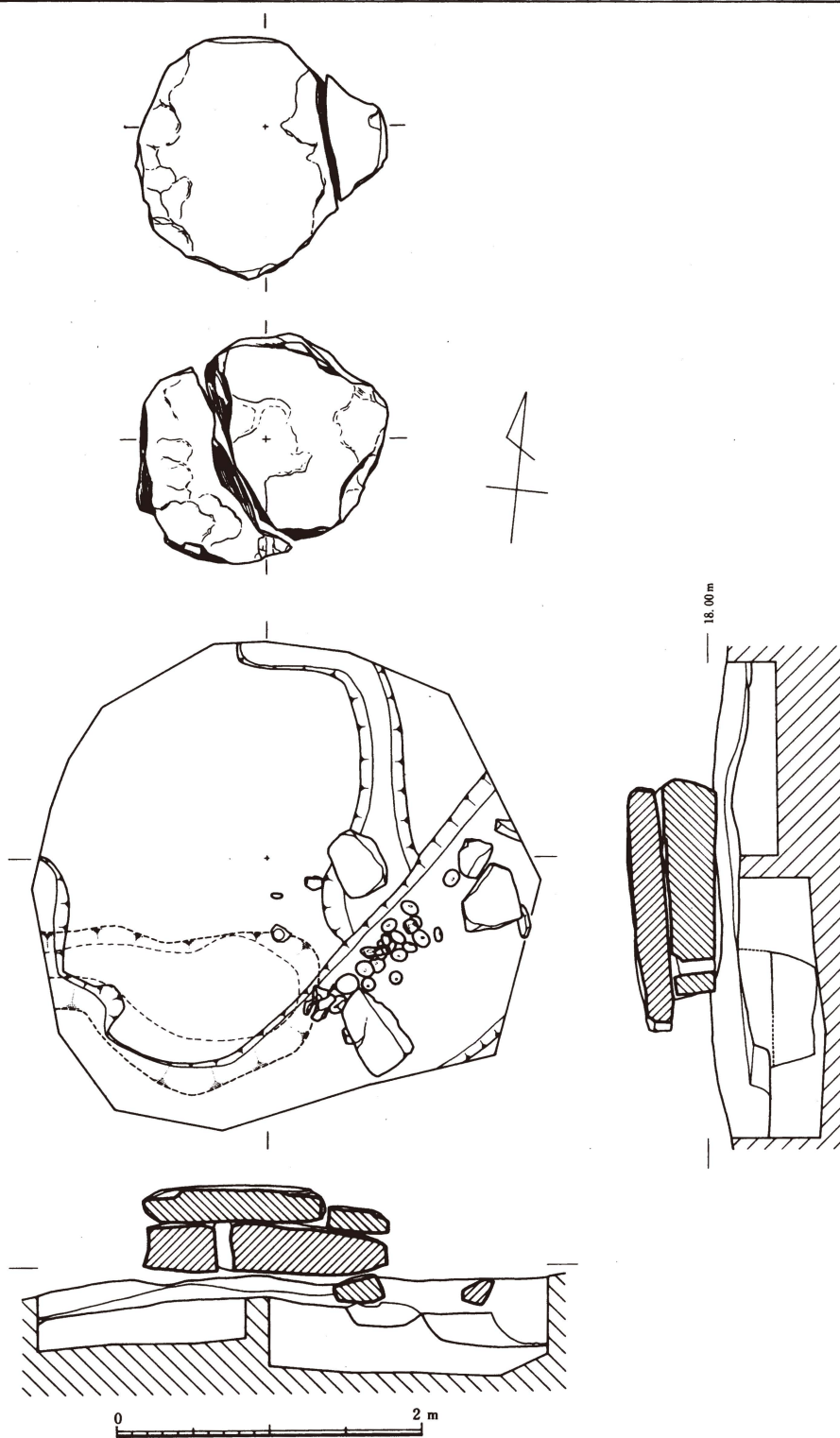
一方道路の拡幅工事によって「大石」東方向20mの地点に南北方向に走る溝状遺構が発見され、調査の結果弥生時代中期中葉の遺構であることが判明した。

昭和51年3月、前記の道路工事によって消滅した防火用水槽の再建設工事によって道路南側が削り取られた結果、崖面に土壌の切断面が発見された。(第3図)

石塚遺跡の子産石は入来台地の東端部にあるシラス台地に立地している。台地は幅約350m、長さ約700mで南北に細長く周囲を水田で囲まれ、標高20m程である。子産石はこの台地の中央より、やや東の民家の庭先にあったが、昭和46年3月頃、旧地主によって470m北の現在地に移された。(第9図) 子産石の元位置付近からは弥生時代終末期の土器および須恵器が出土している。

(河口貞徳)

イ. 入来遺跡の「大石」



第4図 入来遺跡「大石」実測図

「大石」がある地点は、以前調査されたV字溝や今回調査した土壌など弥生時代の遺構のある面から約2m低く、現在の部落の民家が建てられているレベルと等しい。

「大石」は凝灰岩で2枚重なっている。上の「大石」は厚さ20cm前後、径1.4～1.6mの不整円形で東端が割れている。下の「大石」は長径1.6m、短径1.4mの楕円形で、厚さ約30cmを測るが、これも二つに割れている。

「大石」の下は10cm程度の表土があり、その下は紅色のシラス層である。このシラス層には「大石」の南半を囲むように溝があり、また東側から北にかけて浅い溝がある。この溝内からは現代の磁器が出土している。「大石」の東南には、3個の石があたかも「支石」状にあるが、これらはすべて溝底から浮いている。この3個の石の間にたたき石、凹石の集積が検出されたが、それに混じって現代のスリパチがあった。またこのたたき石・凹石群には磨製石斧、弥生式土器片も伴っている。

「大石」の南西で溝と重複して掘り込みがある。この掘り込みの上部にはまわりと同じ紅色のシラスが乗っている。掘り込み内からは現代の磁器片が出土した。この掘り込みと溝との関係は、掘り込みが埋まり上部に紅色シラスが堆積した後に溝が切り込んでいる。

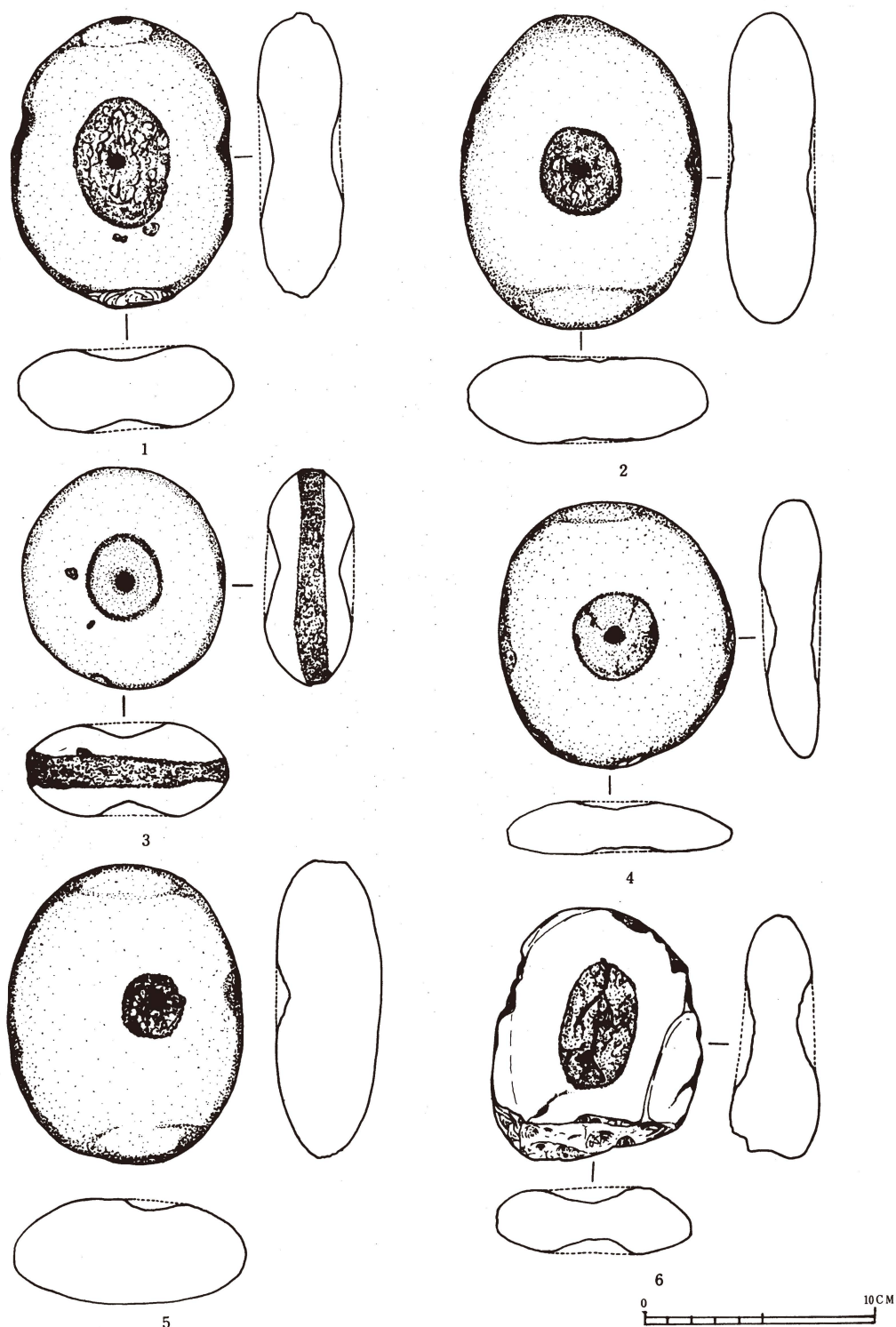
「大石」下の遺構は、上に述べた通りで弥生時代の遺構は何ら存在しない。他の弥生時代遺構とのレベル差と考慮すると、この「大石」所在地は弥生時代以後刷平されており、その削平の過程で耕作や道路のじゃまになる「大石」をここに持ってきたものと考えられる。その間の事情はすでにわすれ去られ、現在この「大石」は氏神様として信仰の対象となっている。

この「大石」は、形態的には西北九州にみられる支石墓の上石に類似しており、入来遺跡や付近の遺跡にも同様なものが存在している。しかし、正式に発掘されその内部構造が明らかになったものはまったく存在しない。したがって、この「大石」と支石墓との関係を断定することは現在の段階ではできない。

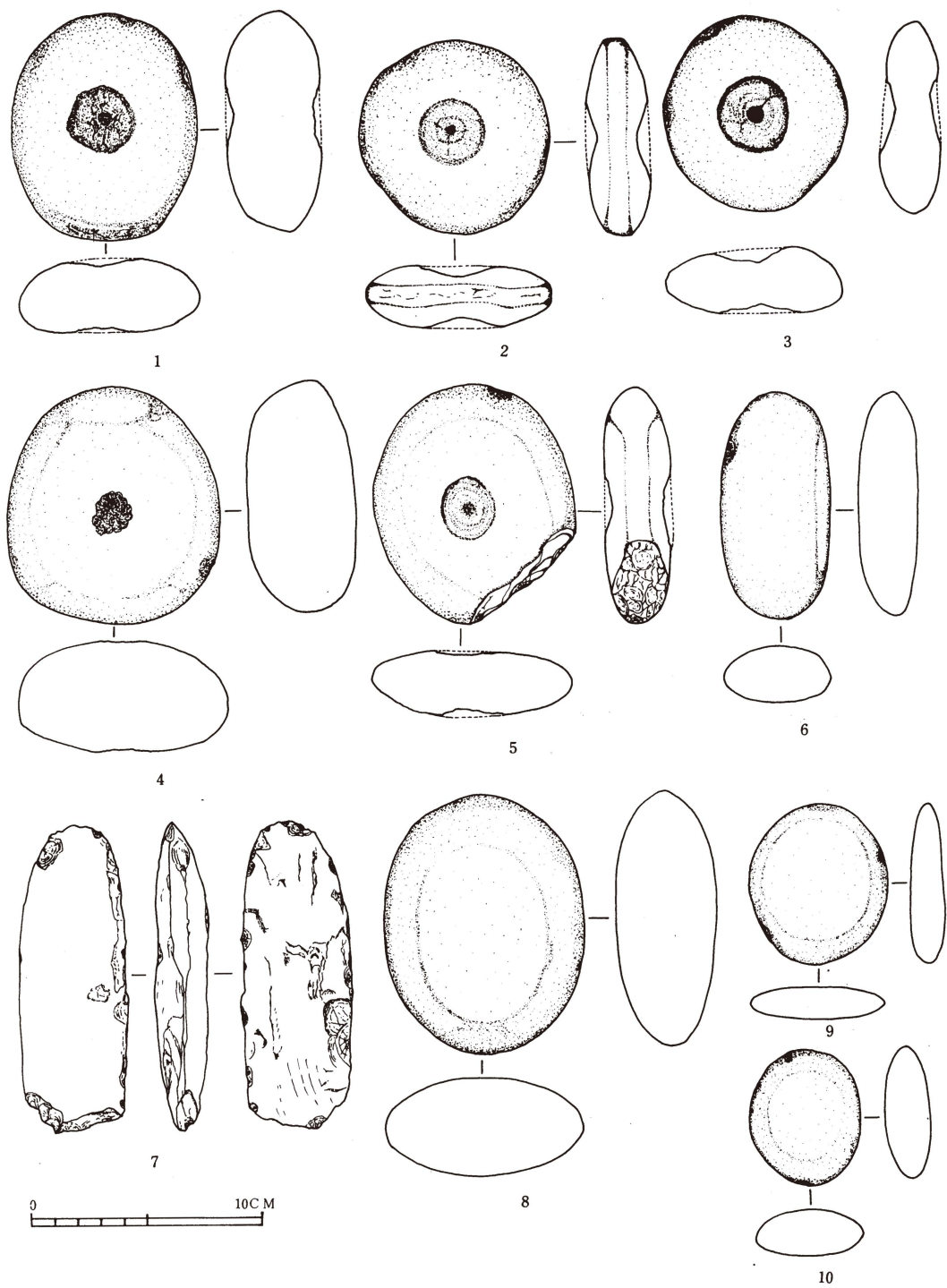
(岩崎二郎)

「大石」附近出土石器

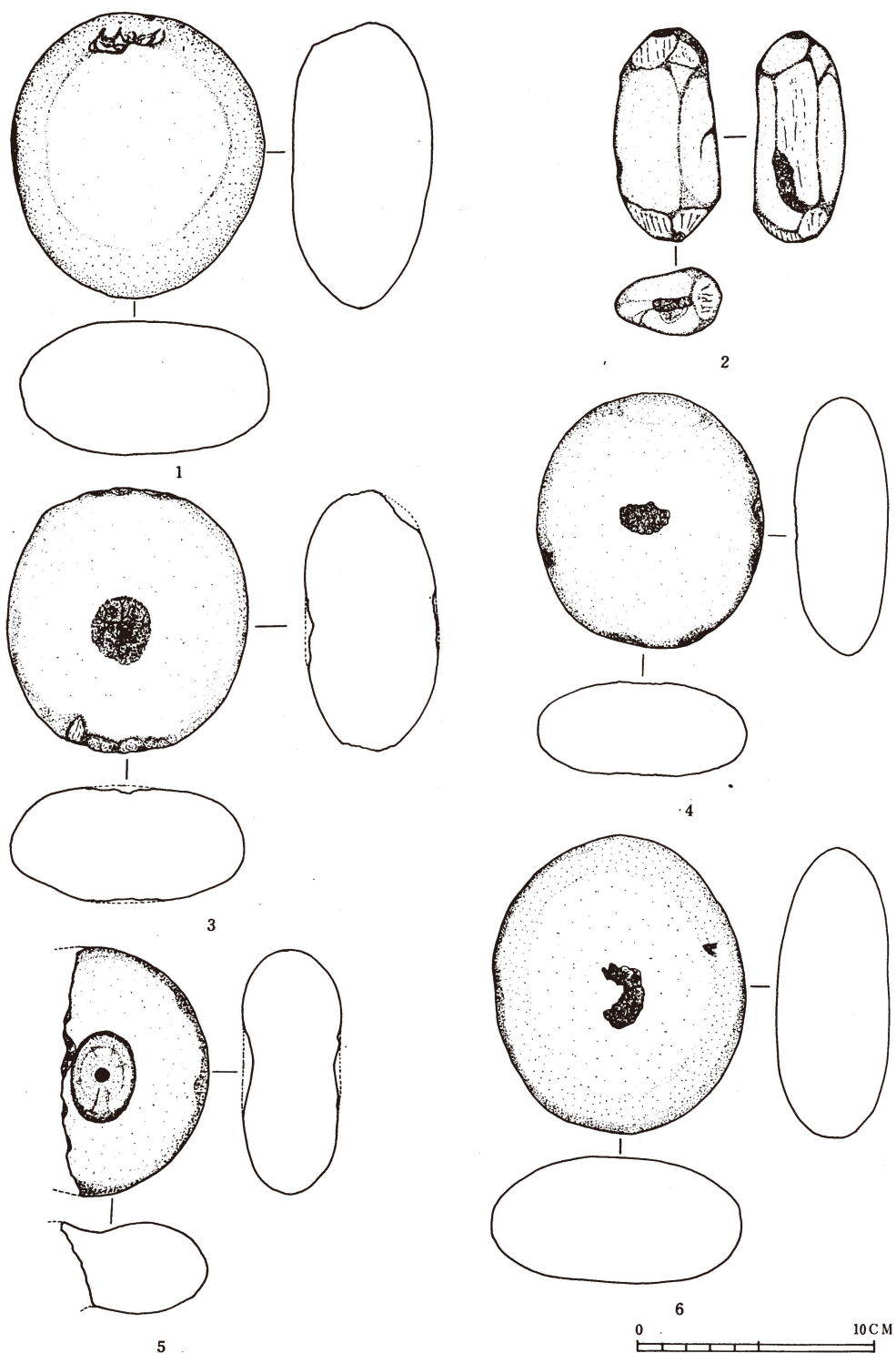
「大石」の下から出土した石には自然石の他に凹石、叩石、すり石等が混在しており、又2枚の石中にも数個の石器がみられる。石材としては花崗内緑岩、安山岩、砂岩等が用いられている。



第14図 「大石」下出土石器



第15図 「大石」下出土石器



第16図 「大石」下出土石器

(1) 「大石」下の石器

凹石 (第14図-1~6, 第15図-1~5)

第14図-1~6, 第15図-1~5, は両面をほり凹めており, ほとんど全面を丹念に研磨しているが, 第14図-6は軟質のため表面の風化が著しい。第14図-5, 第15図-4は片面だけに敲打痕がみられ, 他の面は研磨している。第14図-2・4・5, 第15図-1・3・4は硬質砂岩製, 第14図-1・3, 第15図-2は輝石安山岩, 第14図-6は熔結凝灰岩製, 第15図-5は花崗内緑岩製である。

すり石 (第15図-6・8・9・10, 第16図-1)

全面を丹念に研磨している。すべて砂岩であるが, 第15図-9・10は少々ホルンフェルス化している。

磨製石斧 (第15図-7)

刃部が一部欠損しており, 頁岩製である。

叩石 (第16図-2)

両端に敲打痕があり, 自然石を叩石として使用している。

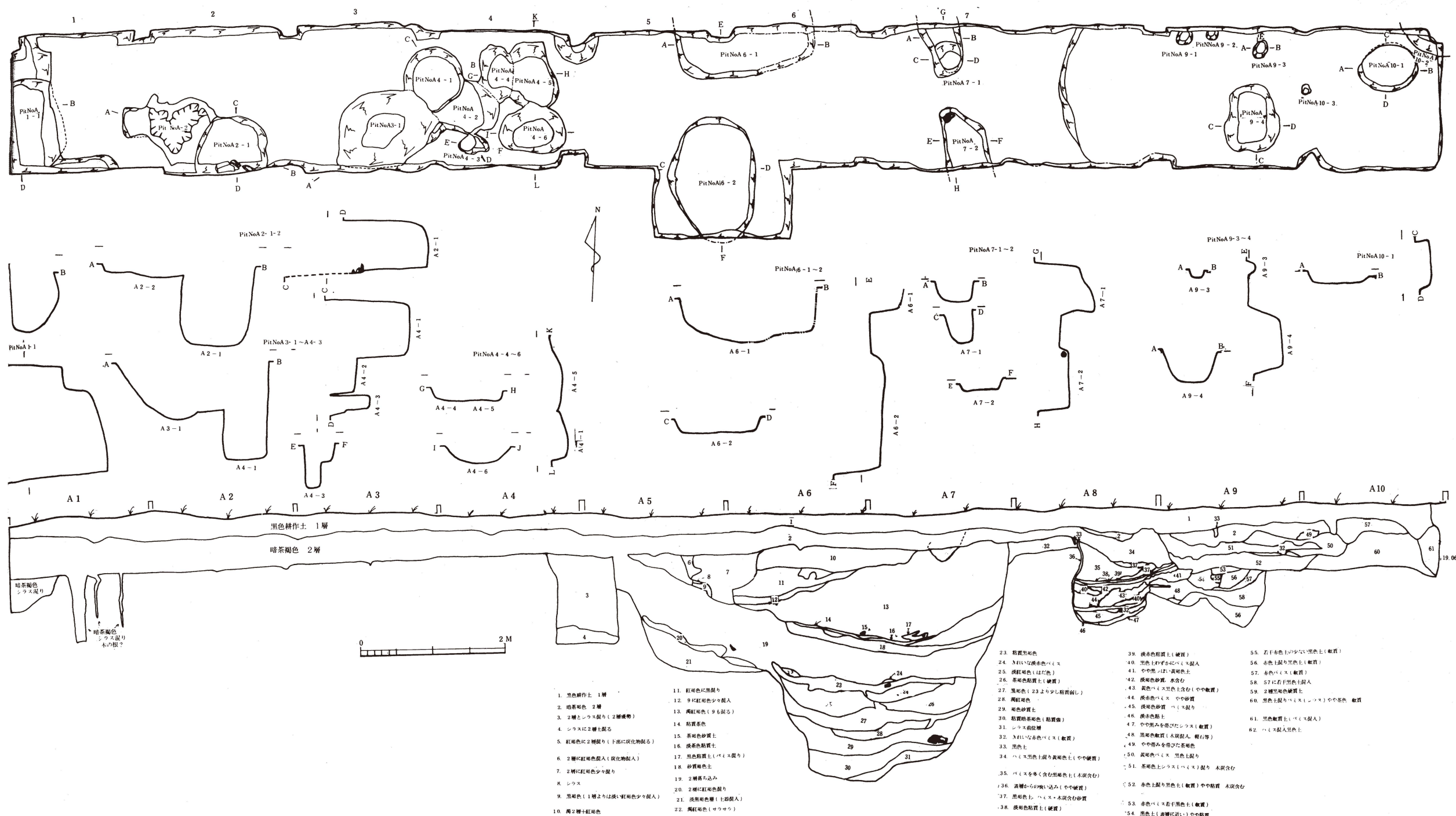
(2) 「大石」中の石器 (第16図-3~6)

3・5は凹石で両面をほり凹め, 全面を丹念に研磨している。3は両端に敲打痕がみられる。5は半分が欠損している。4, 6はすり石を叩石として使用したもので片面だけに敲打痕を残している。4, 5は砂岩ホルンフェルス製, 3は花崗内緑岩製, 6は輝石安山岩製である。

(旭 慶男)

ロ. Aトレンチ

支石墓の東方約5mにはほぼ東西方向に, 幅2m×長さ20mのトレンチを設定し, 西から東へ1~10区として発掘調査を行った。これは, 支石墓や溝状遺構(昭和50年4月調査)との関連を把もうとするものであった。ここには一時期, 隠居家屋があり, それ以前は墓であったらしいが, 現在は竹や草が生い茂っている全くの荒地であった。



第5図 入来遺跡Aトレンチ実測図

遺跡を通過し南吹上駅に至る町道の切通し断面に現われた地層の層序は、第1層、茶褐色層、第2層、暗茶褐色層、第3層、少々黄味を帯びた固い淡褐色層、第4層、パミスの少々混入した軟質の紅褐色層、第5層、パミスを多く含んだ灰白色のシラス層で基盤層となっている。この層序は、この地域の標準的な地層である。Aトレンチを設定した地域は第5層まで削り取られた後の再堆積で、第1層が20～40cmの黒色土、第2層は15～60cmの暗茶褐色層が主で、第3層は灰白色シラス層の地山である。この上二層に、磁器や現代の甕に混って弥生中期の壺や甕の土器片が出土したが、純粹の弥生層ではなく、攪乱が著しい。

5～10区にかけての第2層は、シラス層への掘り込みが激しく、殊に5～8区のそれは、幅5.5m、深さ約3.6mにも及び、8～9区のものでも、幅約2.8m、深さ約1.8mある。後者の層の攪乱状態は著しく、黒色土や赤・黄色パミス混りの土が渾然としており、前者の層は割に整然としており、弥生層の存在も考えられたが、結局それも溝状遺構の層序関係から、第3層のシラス層に相当深く掘り込まれた比較的新しい溝への埋土とみて差し支えないと判断した。

つまり、本来は南側の墓と北側の一段高い畑と繋がっていたものを、現在の畑の面まで広域に掘り下げ、更に東側の5～10区についてはシラス層を掘り込み、殊に5～8区は南側の道路面まで掘り下げ、その後、第2層の暗茶褐色土を中心に埋め戻したのである。そして、掘り込む際に本来あった弥生の遺構が破壊された結果、夥しい土器片が混入したと思われる。

先に述べた深さ約3.6mの落ち込みについては、Aトレンチの南側の町道切通しの面に、幅約8mにわたり埋土の跡が認められ、これが前述の溝状掘り込みの延長とみられる（コンクリートブロックで補強されている）。この溝状掘り込みが道路であったことは、まだ住民の記憶に残っており、台地上にあったという寺院への参道であつたらしい。

遺構としては、2～5区に、ほぼ円形（直径約1m）の割合深い（3層面からの深さ約1m）ピットが検出されたが（pit. №A 2-1, 3-1, 4-1, 5-1等）弥生土器片と共に磁器や近代の甕なども出土しているので、新しい時代のものと推察できる。これは、墓の穴が密造酒の甕の隠し壺だつたと思われる。また、2-1のピットには石が放り込まれており、唐芋壺でないことは明白である。

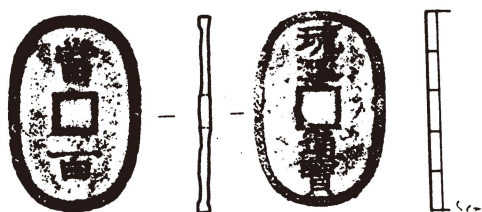
4-4のピットは、黄褐色と黒褐色土の混合土で、弥生時代のもつと思われたが、時代を判定する決め手になるものは出土せず、切り合いの関係から、割に新しいと思われる。

5～6区の6-2のピットからは鉄鑢の柄と思われるものが出土したが、同時にトタン屋根を打ちつけるのに用いる直径2cmほどの鉄製の円板のついた釘も出土し、現代のものと断定せざるをえなかった。

全体として、これら全ての遺構は新しく、近世へ近代のものと考えて誤りはないと思う。

遺物

ほとんどが弥生式土器で、時代は中期中葉が大部分で、中に前期後半のもの（第17図-4）、土師器把手（第17図-8）、須恵器片（第19図-1～7）があり、外に砥石、すり石、軽石の加工品などが出土した。また、3区の第1層（深さ32cm）から“琉球通宝（第20図）”が、4

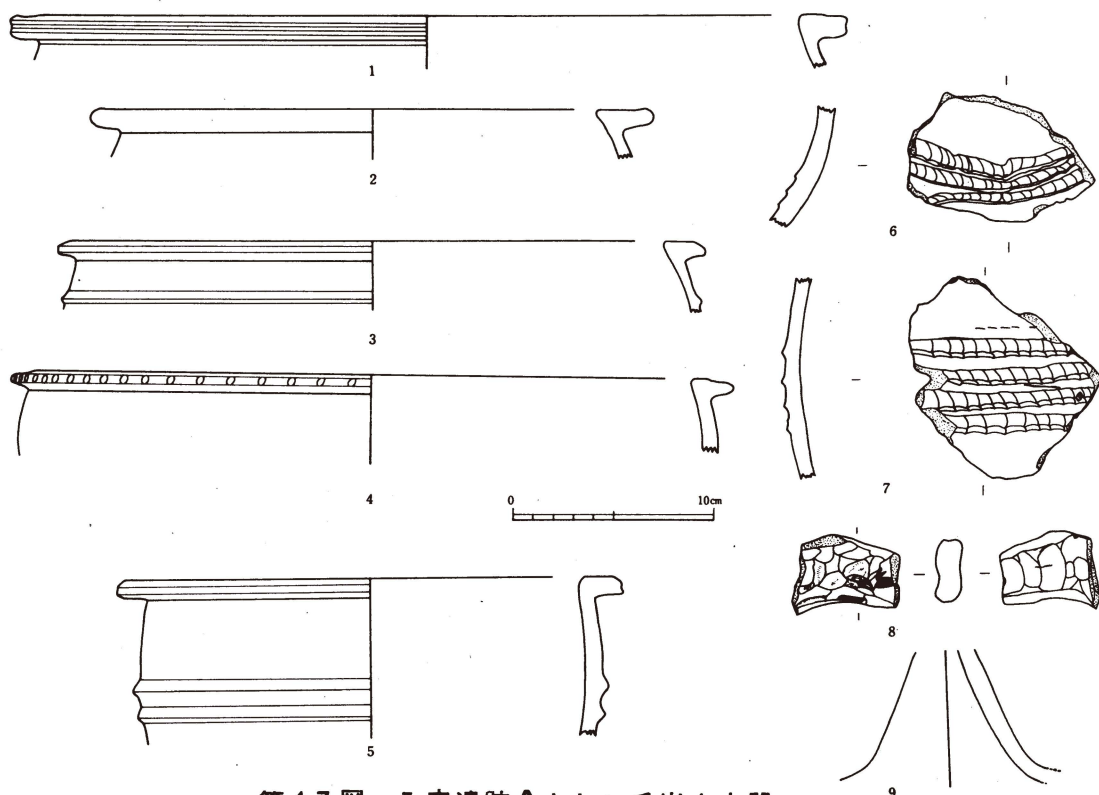


第20図 入来遺跡Aトレンチ出土
琉球通宝拓影

— 1のピットから“寛永通宝”が各1個出土した。

(1) 甕形土器 (第17図-1~5)

4の土器は「」形口縁で、刻目を有し前期終末期と見られる。頸部以下には刷子目を施し、口縁端はやや薄くなっている。焼成は割に良く、胎土も砂粒を含むが良質であり、色調は淡黄褐色を呈する。



第17図 入来遺跡Aトレンチ出土土器

3は中期中葉、山ノ口式と入来式の間位置すると思われる、刻目のない貼り付け突帯であり、口縁部は外側へやや傾斜する。8~9区の落ち込みの黒褐色土中から出土し、黄褐色を呈する。焼成は普通、胎土は砂粒を含みやや粗質である。

1も中期中葉であり、4~5区の北側断面の黒褐色土中より出土し、外面は全体的に黒褐色であるが、口縁部や内側の全体にススが付着していて、光沢がある。焼成は良好で、胎土も細かく良質である。口唇部のほぼ中央に一本の溝が通っている。

2は中期後半のいわゆる須玖式で、口縁部は屈折して幅広い平坦面を形成している。8区ピット1の黒色土中から出土し、焼成は割合に良好であり、胎土は粗で、外面は黄褐色である。内面に口縁部に平行に刷目が施されている。

5は6区ピット1の灰黒色砂質土中より出土し、外面は黒褐色、内面は黄褐色を呈する。焼成は良好で、胎土も良質である。胴部に2本の絡縄突帯があり、6・7の壺形土器片と同一時期に属するものと推定されセットをなすものといえよう。

(2) 壺形土器(第17図-6・7)

7は6区の第2層下部黒色土中より出土した。外面は褐色であるが、一部は黒褐色、内面は黄褐色を呈する。焼成は普通であるが、胎土は粗い。4本の絡縄凸帯をめぐらす壺形土器の胴部破片である。凸帯上部の器面には凸帯を篋で押圧した際に生じた爪形圧痕が見られる。

6の土器片は「7」の土器と同様に壺形土器の破片で、頸部にあたる部分の破片である。胎土は良質で、色調は表面は褐色、内面は黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部との境に縄状の突帯3条をめぐられている。

(3) その他の土器(第17図-8・9)

9は3区ピット1黒褐色土中より出土した。外面は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。高杯形土器の脚台であろう。後期末に属する。

8は土師器の把手で、甕の両側に突き出た把手の一部であり、時期的にも相当新しいと思われる。4区ピット2の黒褐色土中より出土し、全体的に白褐色で、表には靫の圧痕様の相当に大きな痕が残り、また黒いススのようなものが付着している。裏には、中央に赤茶色の血痕様のものがにじんでいる。焼成は良く、全体としてカワラ質である。



第19図 入来遺跡Aトレンチ出土須恵器拓影

(4) 須恵器(第19図-1~7)

1~7の須恵器片は、部位を明確に判定できるものはなく、胴部の一部と見るのが妥当と思われる。

1は1区黒褐色土中より、4～5は6区黒色土中、6は5区ピット1黒土中、7は6区ピット2の黒褐色土中から出土し、また、2～3は表面採集により採取したものである。

(5) 土器底部(第18図-1～13)

甕形土器の底部が厚くなるのは弥生時代前期終末であり、南九州では中期初頭にかけて極度に厚くなりついに脚台として定形化するに至る。2～10の甕形土器底部は脚台化したもので、底部がやや上げ底となった5～8・10の土器は時期的にみて古い形式で中期前葉に多く見られ、2～4・9の如く底部の平坦なものは中期中葉～後葉に属する。1・12の土器は底部の肥厚が見られ脚台化への漸移形態と見られる。

11はやや上げ底となっているが鉢形土器の底部と見られ中期に属するものであろう。

13は碗形の土師器底部である。

(6) 石器(第18図-14)

敲石(14) 落ち込み中の上部 シラス面直上(水系より-1.55m)より出土。長径137.5%, 推定短径115.5%, 重量1150g。表裏にある敲痕はかなりくぼんでいる。全体が粗面を呈し、敲痕が散在している。石質は砂岩である。

Aトレンチ考察

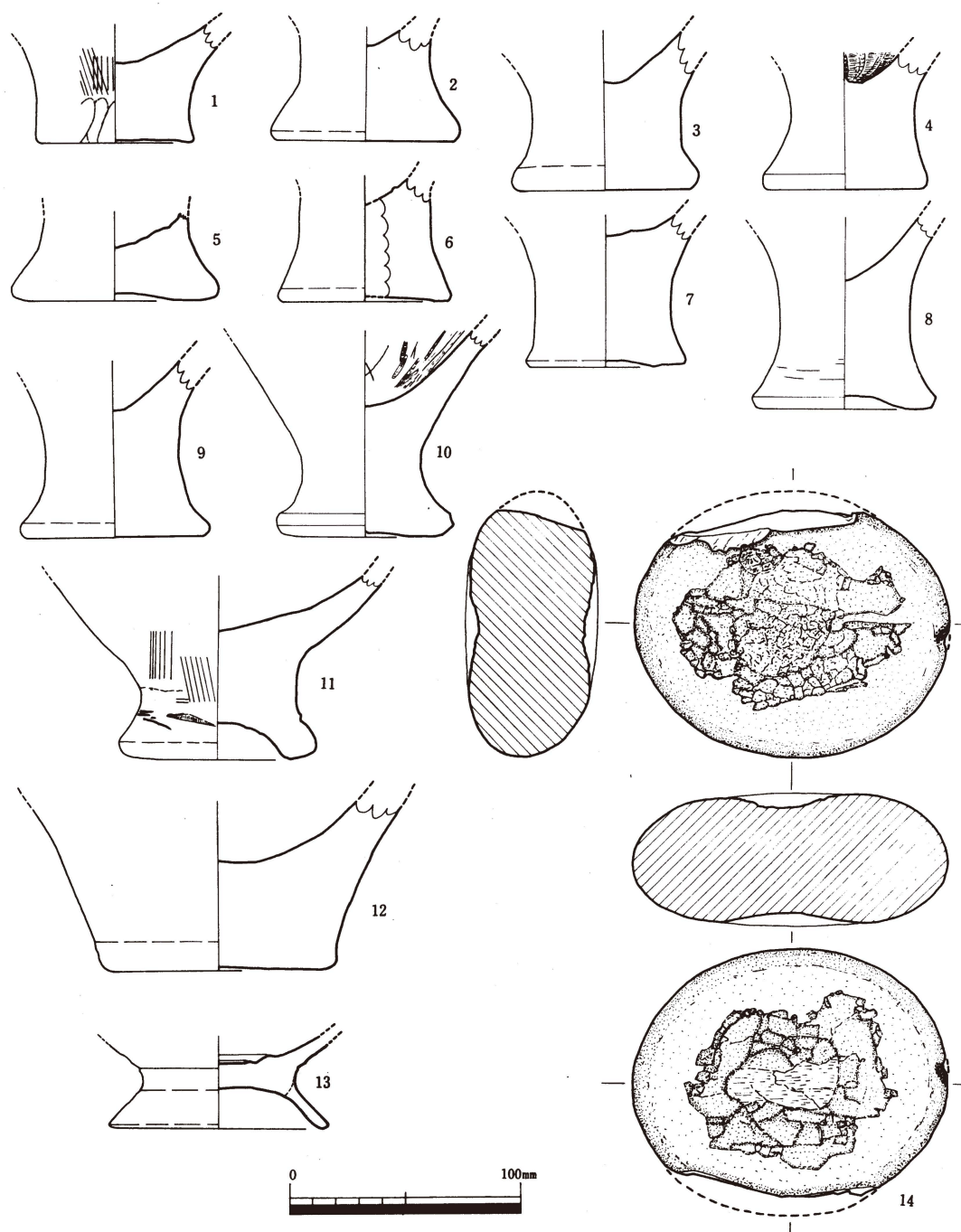
当遺跡には、土器片の相当数の散在などにより、弥生時代の遺構があったことは確実であるが、後世の耕作や掘り込みなどにより攪乱をうけており、本来の遺構そのものは把握できなかった。耕作や掘り下げを行った時点で攪乱され、現在に至ったと思われる。それ故、支石墓や溝状遺構との関連も解明できなかった。

(繁昌正幸・平島勇夫)

ハ. Bトレンチ

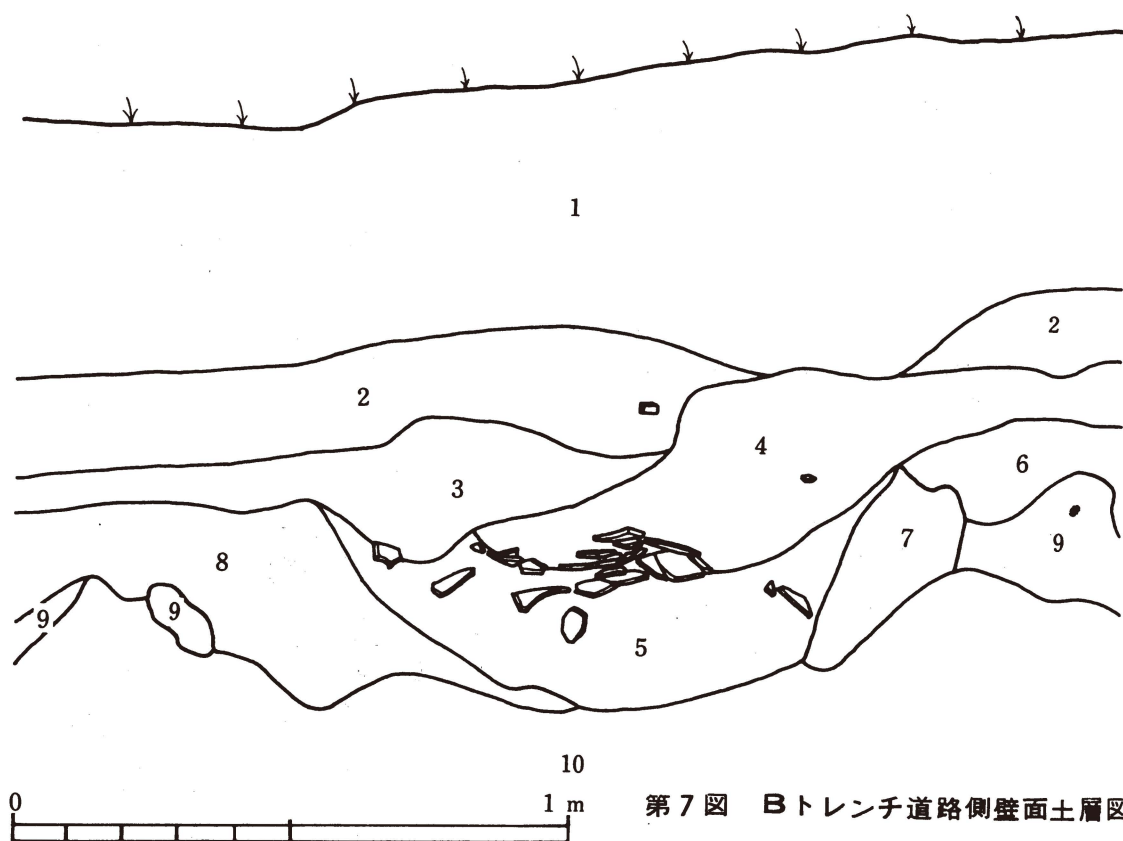
大石地点に沿って南吹上駅に通ずる道路の南側は台地となり、道路面は切り取られて崖面を形成している。この崖面に土壌の切断面と思われる落ち込みが発見された。この落ち込みの確認のためにBトレンチを設定した。落ち込みは、防火水槽新設のため道路南側の台地を削った結果出現したもので、Bトレンチ地表面と道路面との比高は3mほどである。この台地の東側には旧道建設の際の掘り込みと、南側へ続く住宅地の造成時の地形変更が推定され、落ち込みが形成された時期に比較して現在の地形は相当異なるものになっているであろう。

Bトレンチでは前記の落ち込みの外に、第2層から第3層への落ち込みが、南端地点に検出されたが、附近に堆積している近世の墓石に関連するものと推定された。



第18図 入来遺跡Aトレンチ出土土器・石器実測図

L. 21.015 m

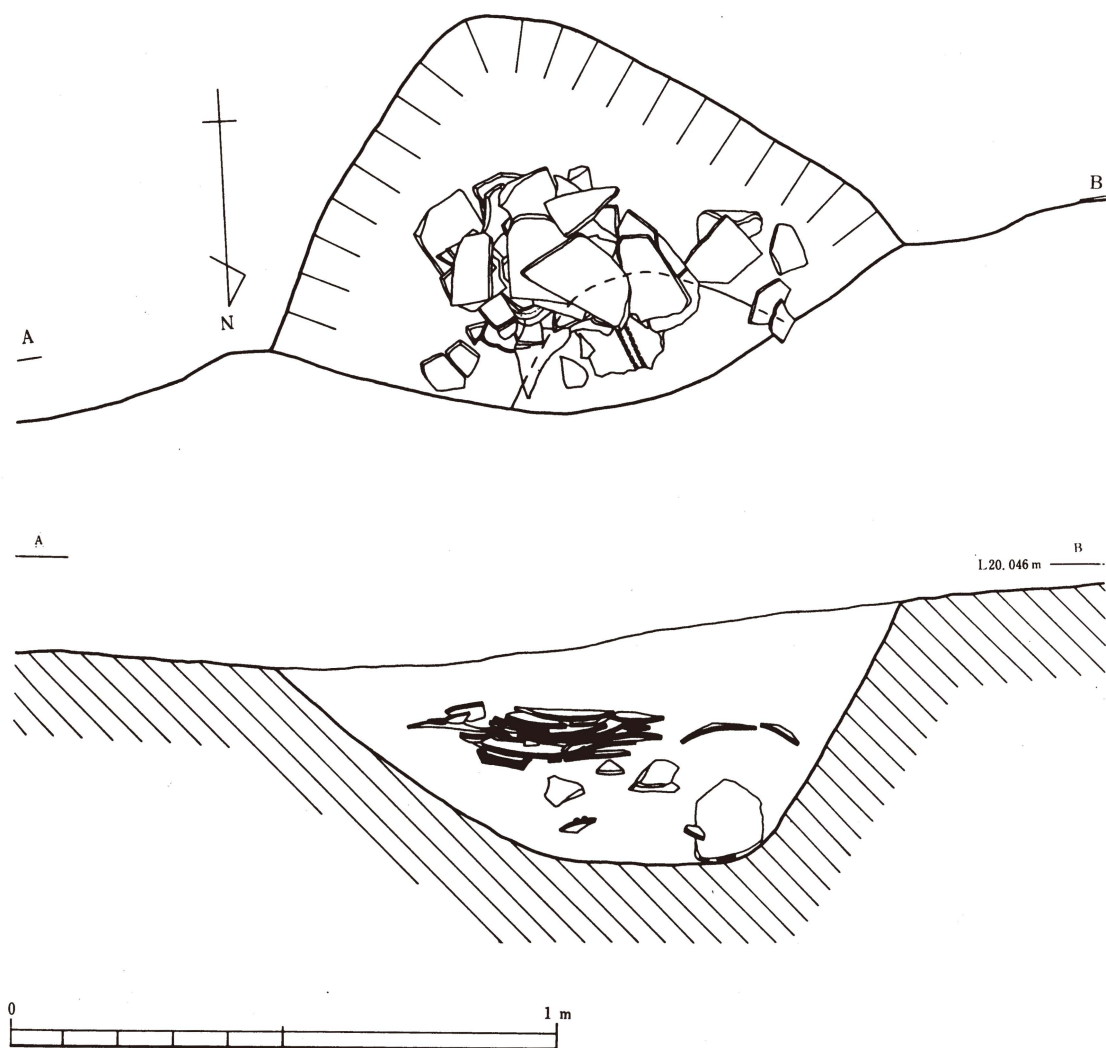


第7図 Bトレンチ道路側壁面土層図

- ① 表土(黒褐色土) ② 暗茶褐色土 ③ 黒色土混入暗茶褐色土 ④ 茶褐色粘質土
 ⑤ 黄褐色土混入茶褐色土 ⑥ 茶褐色砂質土 ⑦ 明茶褐色砂質土 ⑧ 茶褐色土混入暗黄褐色土
 ⑨ パミス混入黄褐色砂質土 ⑩ 桃褐色シラス

層位(第7図)

第1層は、黒褐色土で、厚さはほぼ45cmである。地表には有機物が未分解のまま堆積している。第2層は、暗茶褐色土で、厚さはほぼ15cmである。径1~2cmの軽石が目立って多い。第1層よりの掘り込みが見られる。第1層、第2層とも自然堆積層であり、ガラス・陶器片を含む。第3層は、黒色土混入暗茶褐色土で、厚さは落ち込み部ではほぼ20cmである。攪乱層である。第4層は、茶褐色粘質土で、厚さは落ち込み部ではほぼ35cmである。自然堆積層であり、全面に存在したと推定されるが、東側において第3層によって切断されている。第5層は、黄褐色土混入茶褐色土で、厚さはほぼ25cmである。落ち込み形成の際の埋土であろう。第6層は、茶褐色砂質土であり自然堆積層であろう。第7層は、明茶褐色砂質土であり、第6層と本質的には同一層であろう。第8層は、茶褐色土混入暗黄褐色土で、最大での厚さは27cmである。第8層下部においてはシラスが小ブロック状に見られ、攪乱層である。第9層は、パミス混入黄褐色砂質土で本来全面に存在したと推定される。第10層は、桃褐色シラスである。上部では有機質のしみ込みが見られる。



第6図 入来遺跡Bトレンチ土坑図

遺構(第6図)

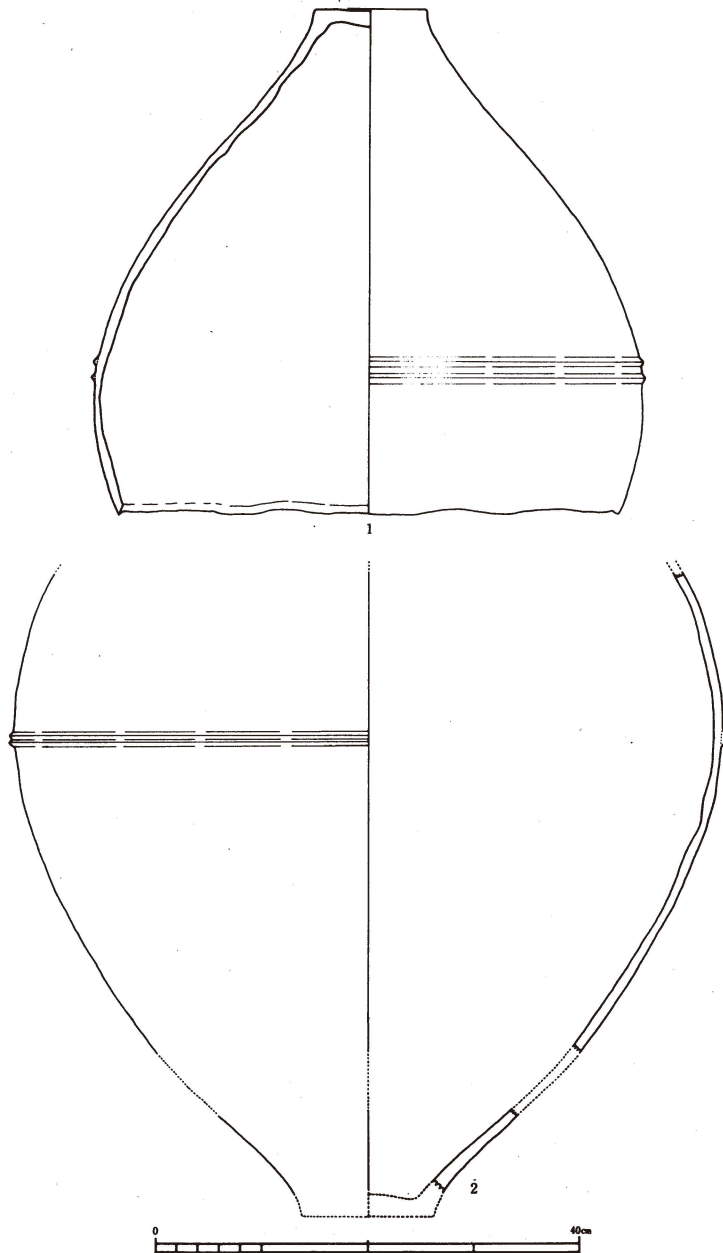
Bトレンチの落ち込みは、防火水槽新設のために、北側が $\frac{1}{2}$ ほど削られており、現存部は南北74cm、東西119cm、深さ48cmを計る。落ち込みは、本来楕円形で長軸がほぼ北西-南東方向の土坑と推定される。しかし、土坑は、後世に至って攪乱を受け、特にその上部では、原形が変化していることも考えられる。土坑は、第7層と第8層に掘り込まれたものであり、第8層は、土坑形成前の攪乱層であるが、その時期は不明である。土器の出土状態を見ると、床面に密着して原位置を留めるかと思われるものも見られたが、ほとんどの土器片は、第4層下部で土器内面を上に向け、意識的に重ねられたような状態で出土し、間に砂がはさまった部分も見られた。

土坑より出土した土器は、甕形土器2個体分であるが、底部は1個体分、口縁部は全く出土しな

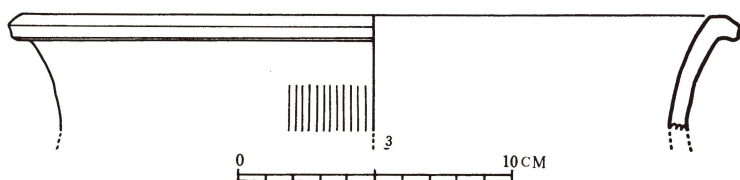
かった。これは北側が削られていたためであろうし、後に述べるように一度取り上げられていることも関係しているであろう。

以上のような出土状態から考えて、何らかの理由で土壌が後世に掘り込まれた際、取り上げた土器を再び投げ込んだと考えられる。

その時期は、第4層が堆積する以前であろう。また、第4層堆積後も土壌東側では攪乱を受けている。土壌より出土した甕形土器は、甕棺であった可能性が強い。その場合、この土壌はその墓墳であったと考えることができよう。



第21図 入来遺跡Bトレンチ土坑出土土器実測図



第22図 Bトレンチ出土土器実測図

出土土器（第21図・第22図）

(1)・(2)は、甕形土器で、土壌内より出土し、(3)は壺形土器で、第4層より出土した。

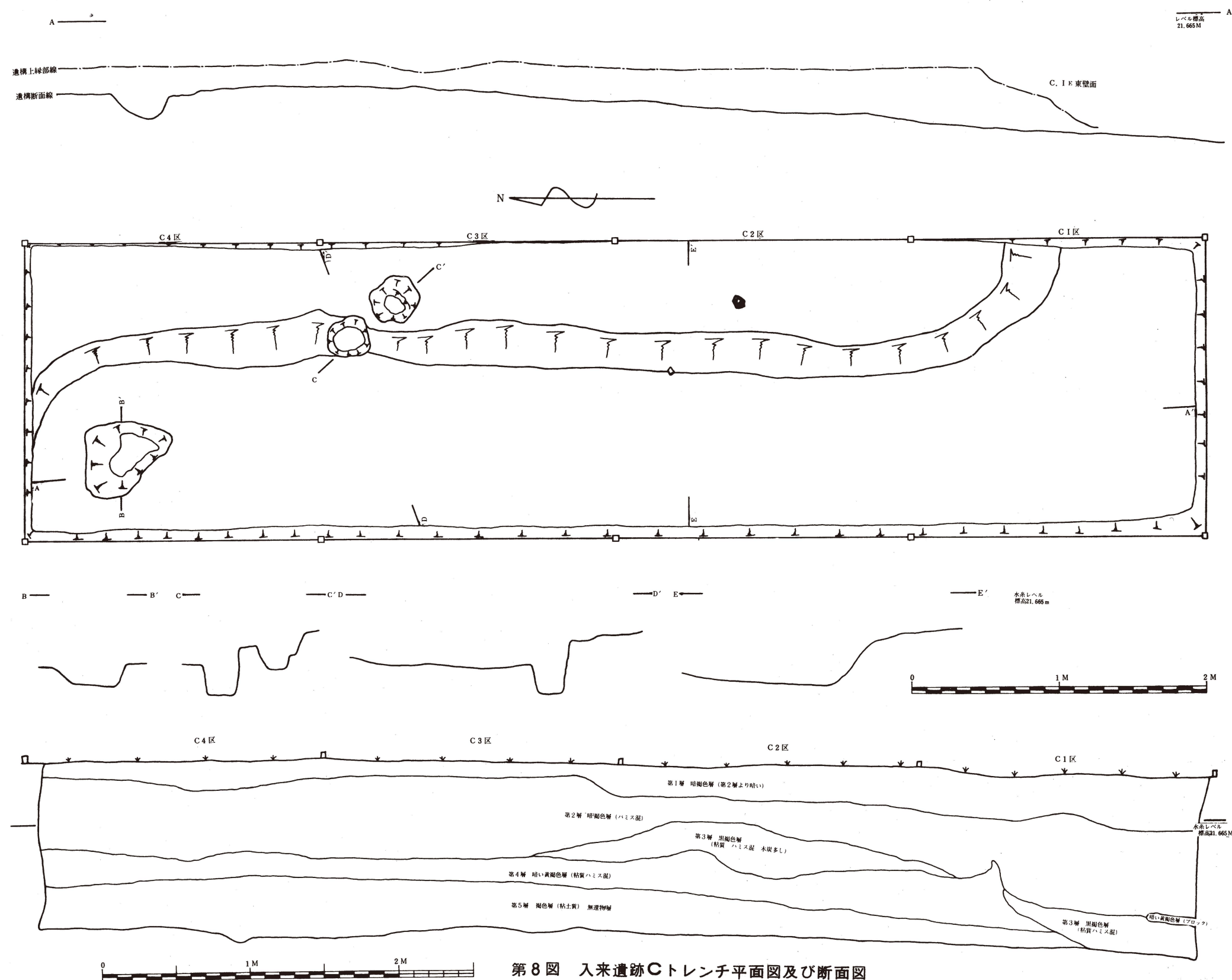
(1)は、肩部から上を意図的に打ち欠いている。最大径は、内径5.0cm、底部外径10.8cm、壁の厚さはほぼ0.9cmである。胴部には2条の三角突帯をめぐらし、接着の際に横なでして器面を調整したあとが見られ、底部はわずかに上げ底気味で、底部内面には酸化鉄が付着している。色調は、外面茶褐色、内面褐色を呈し、焼成は良好である。(2)は、肩部から口縁部と底部を欠いている。最大径は、内径6.5cm、壁の厚さはほぼ0.9cmである。胴部に一条の複線突帯をめぐらしている。突帯と突帯上下にヨコナデ、内外面ともナデ調整。色調は、赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好である。(3)は、口縁部破片である。口縁周辺には、ヨコナデが施されており、頸部外面にはハケメ、内面は斜位のヘラ調整である。色調は、外面暗赤褐色、内面赤褐色を呈し、胎土は少量砂粒を含み、焼成は良好である。流れ込みによるものであろう。

以上がBトレンチ出土の土器で、(1)・(2)は甕棺として使用されたものであろうか、その場合、(1)は上甕として使用されたのであろう。

北部九州よりの移入品と考えられる。弥生時代中期後半に比定できよう。(3)は、南九州の土器であり弥生時代中期中頃に比定できよう。
(多々良友博)

二. Cトレンチ

Cトレンチは、支石墓及びAトレンチより北側の一段高い台地上、川路昭二氏所有畑地に略南北方向2m×30mで設定し、南側より1区、2区、3区……15区とした。今回調査したのは、そのうち1区～4区、16m²である。本台地には、全域にわたって土器片が散布し、又これまでの調査により台地東端において、弥生中期から後期にかけての溝状遺構、住居址等が発見されているところからすれば(註1)、この台地の相当広範囲に弥生期生活遺構が埋没していることが予想される。本トレンチ設定の主目的は、この弥生期生活遺構の調査であった。



第8図 入来遺跡Cトレンチ平面図及び断面図

層位及び出土遺物・遺構（図参照）

本トレンチでは、基盤となるシラス層の上に5層を数えることができる。上部より第1層暗褐色層、第2層パミス混入暗褐色層（第1層よりやや明るい）、第3層粘質パミス混入黒褐色層、第4層粘質パミス混入暗黄褐色層、第5層粘質褐色層、第6層基盤シラス層となっている。このうち遺物を包含するのは第1層～第4層までの上部4層であるが、各層とも、弥生式土器・土師器・須恵器・陶器片等が出土し、攪乱状態であった。いずれも小破片で、弥生中期初頭～中頃の甕形土器片、壺形土器片が最も多くみられる。なお、1区～4区まで第5層を掘りこんで、何らかの遺構が認められた。発掘範囲が小範囲のため、その形状・性格等を明確にすることはできないが、4区で掘りこみ壁線は西側へまわりこみ、1区で東側へまわりこんで広がっており、3区4区にはそれに伴ってピットが8カ所検出された。この遺構内には、1区を除いて4層が堆積し、上部に3層土が堆積していたが、4層下部（遺構底部近く）においても陶器片が出土しており、この遺構形成時期は相当下降するものと考えてまちがいあるまい。

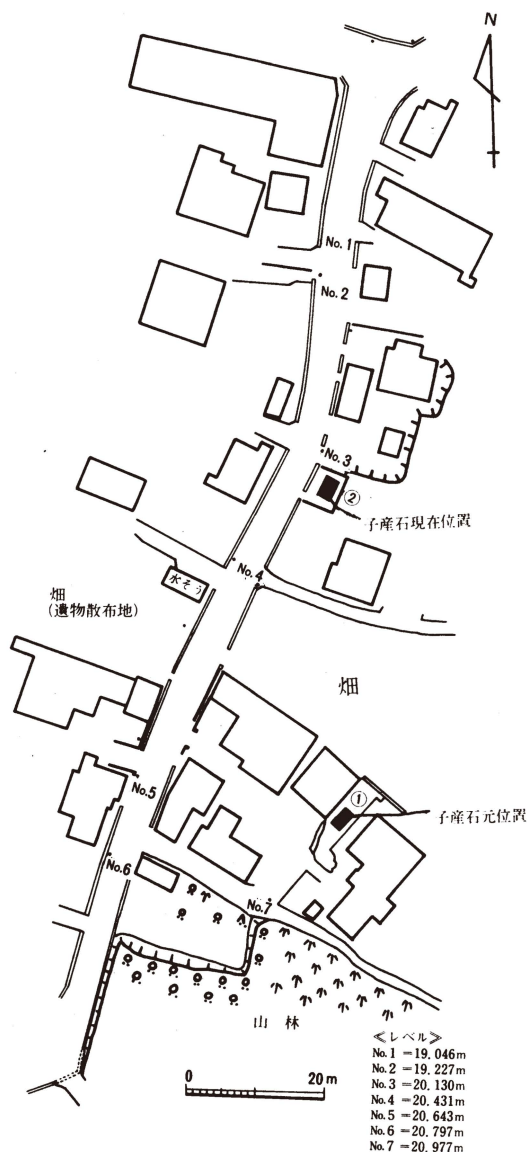
Cトレンチは、当初の目的にはずれ、残念ながら最下部まで弥生期の包含層を検出することはできなかった。しかしながら、出土遺物に弥生中期土器片が多数を占めているということは、付近に弥生中期包含層が存在する可能性が強く、あるいは第5層を掘りこんで遺構が形づくられた時、この包含層が消失したものかもしれない。トレンチ付近一帯に濃密に土器片が散布している事実は、発掘結果と共にそのことを物語るものと思われる。

（註1） 入来遺跡発掘調査概要

吹上町教育委員会
（本田道輝）

3. 石塚遺跡

石塚遺跡は鹿児島県日置郡吹上町入来小字石塚にある。上村俊雄（ラ・サール高校教諭）を石塚遺跡の調査責任者とし、平島勇夫（鹿児島大学学生）伊崎俊秋（九州大学学生）三



第9図 石塚子産石周辺図

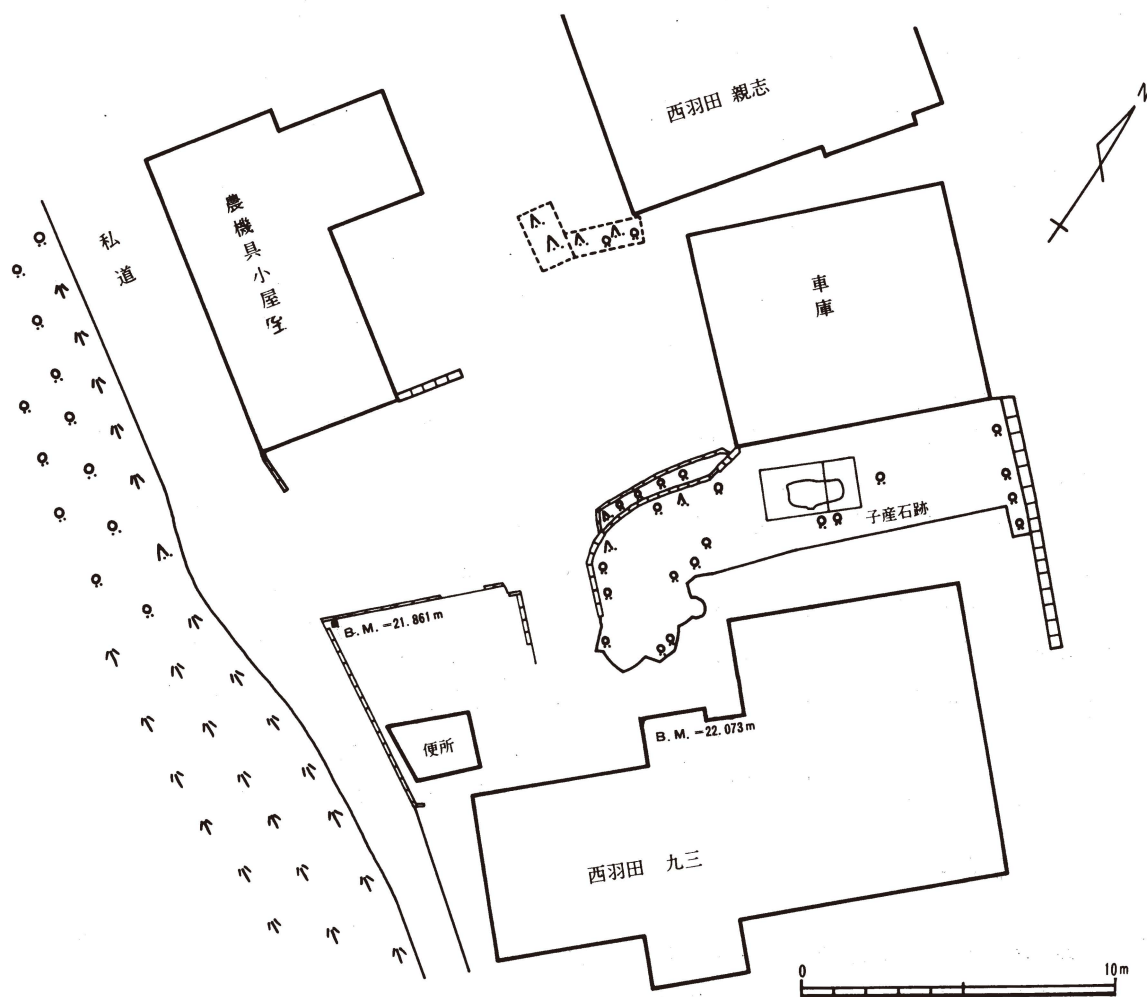
宅仁(北里大学学生)猿楽いづみ(鹿児島大学学生)諏訪下久子(加世田女子高生徒)が調査にあたった。なお地形測量図作成にあたって、下水流明美(加世田女子高生徒)の協力を得た。

調査の対象となったのは、石塚部落の町道沿いに、通称「子産み石」とよばれ、安産の神様として信仰の対象とされている巨石である。この巨石が支石墓の可能性をもっているのではないかという観点から調査が行なわれた。「子産み石」は、本来、吹上町入来780番地の西羽田力蔵氏の宅地内に安置されていたが、昭和46年2月～8月頃、現在地に移されている。現在の管理者は、吹上町入来758番地の石塚義治氏(現吹上町町長)である。

石塚家の氏神様として祀られている。

「子産み石」は、一見牛がうずくまった恰好に見える。注連縄を張り、「子産み石」の周囲に浜砂が敷かれ、「子産み石」の前面に凹石、叩き石、貝殻が大量におかれている。

石器類の大きいものは30cm前後、小さいものは3cm前後、中間のものは10cm前後の大きさで



第10図 石塚子産石元位置周辺図

あり、合わせて約180個程おかれている。妊婦が出産前、「子産み石」に御参りをして、石を1箇持ち帰り、出産後、お礼に石を1箇加え(計2箇)で、「子産み石」の前に置く慣習となっている。

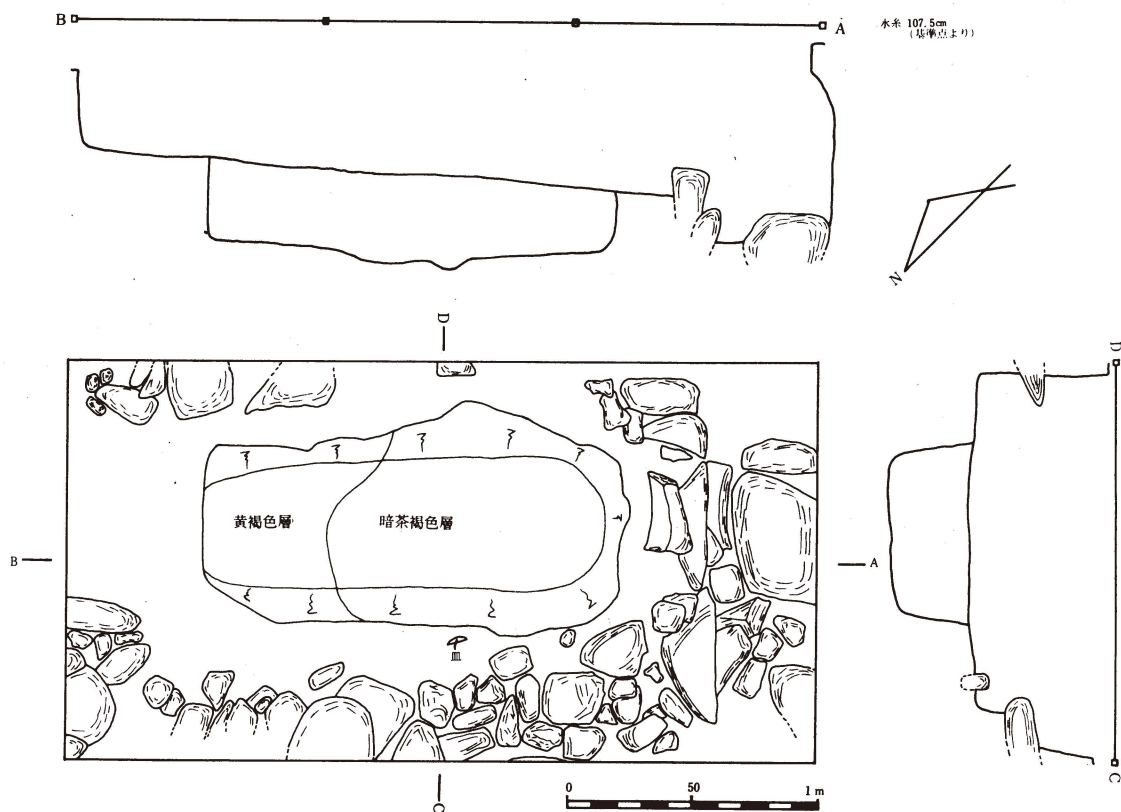
また、大晦日の夜、海岸に行き、元日の朝まだ暗い内に、波打ち際の貝殻を拾って、中に砂を入れて「子産み石」の周囲に撒く風習が毎年行なわれているという。

「子産み石」の大きさは、最大長218cm、最大幅127cm、高さ117cmである。下部は空洞になっている。石質は凝灰岩でもろく、クレーンで持ちあげた際の圧力で、剝落部分が多い。風化もひどい。

「子産み石」が以前おかれていた場所に、はじめ、南北2m×東西1.6mのトレンチを設定した。後に作業の進行状況を見て、南北の線上を北に1m延長し、南北3m×東西1.6mに拡張した。

トレンチを掘り下げていくうちに、地表下50cm前後の深さのところから石組み遺構が出てきた。後に判明したことであるが4～5年前まではこの石組み遺構に囲まれた範囲内に「子産み石」が安置され、その上を屋根で覆っていた。この面が数年前の地表面である。

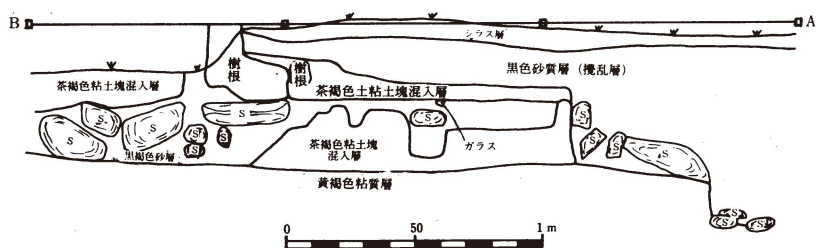
石組み遺構の面まで掘り下げていったが、ガラス、ビニール、瓦等の異物が多く見られ攪乱層となっている。また石組み遺構中よりファンタグレープのガラス破片が発見されたところから石組み遺構はごく最近に築造されたものと推定される。石組み遺構内の「子産み石」を抜きとったあとに土填らしきものの存在が認められた。



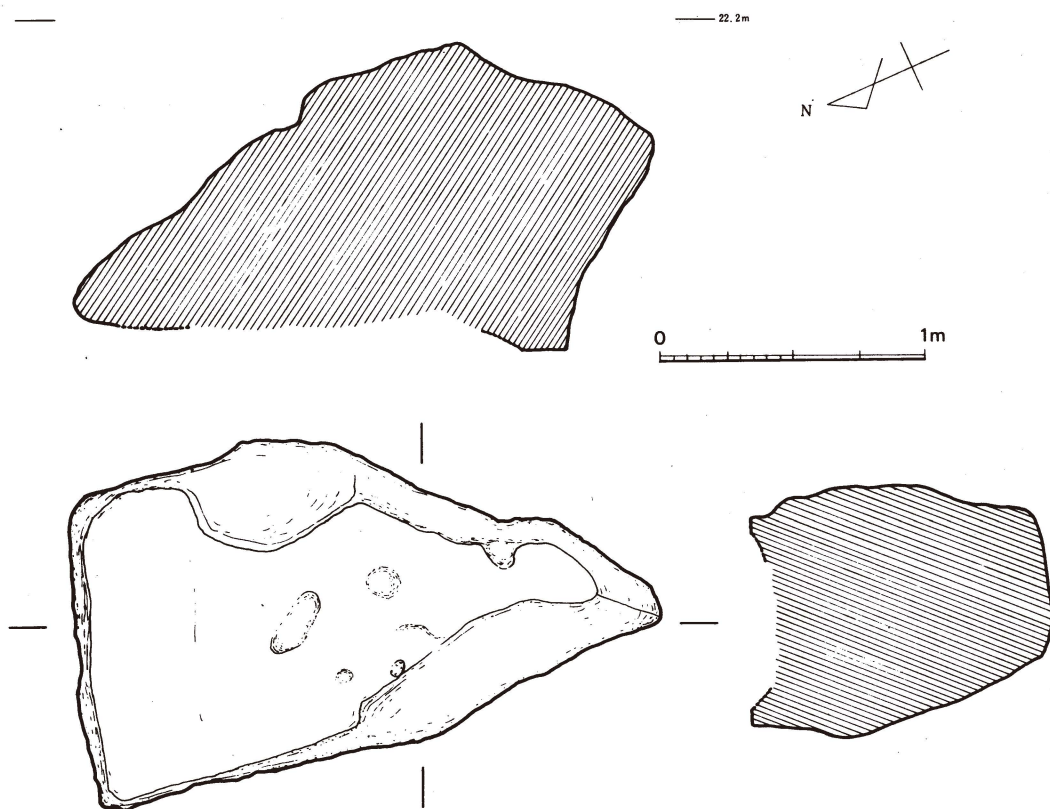
第11図 石塚子産石元位置図

西羽田力蔵氏
夫妻及び近辺の
人々の証言によ
れば、この土壌
らしきものは、
「子産み石」を
クレーンで動か
した後、作業従

事者が巨石の所在したあと地を掘り返して探索したあとであり、この作業では物は発見されず徒労に終わったという。また「子産み石」の配置については特別の基礎はなく、ちょこんと置かれていた



第12図 石塚子産石元位置西壁地層図



第13図 石塚子産石実測図

とのことである。その後、西羽田家はこの場所にずっとゴミを捨ててきており、それが現在見るところの瓦、ガラス片、ビニール等を含む攪乱層に該当するものであろう。

攪乱層をのぞいた後、前述したように、土壌らしき「ホリカタ」があったが、この部分を少しずつ掘り下げていくと、きれいな黄褐色火山灰層となり、その中から「昭和22年」銘の50銭硬貨と「大正11年」銘の1銭硬貨が出土した。恐らく、おさい銭として供えられた貨幣が、「子産み石」をぬきとったあとのほりかえした穴に落ちこんだものであろう。

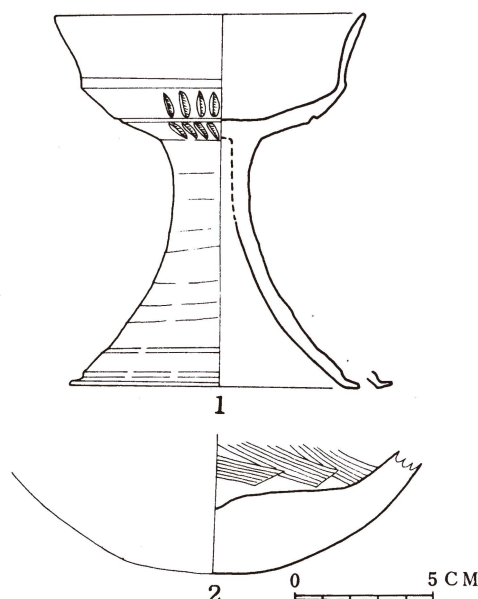
この「子産み石」については、江戸時代につくられた「三国名勝図会」に記載されていないが、少なくとも50年位前には、すでに信仰の対象になっていたという。

とすれば、江戸時代末期以降に存在したものはなかろうか。

いろいろな点から「子産み石」は支石墓ではなかったという結論を出さざるを得ない。

なお、石塚遺跡の周辺には、遺物の散布が見られる。石塚町長宅には、附近から出土したという、須恵器（高杯）と成川式が保管されている。

（上村俊雄）



第23図

石塚遺跡子産石付近出土土器実測図

入来遺跡の西南地区は弥生時代の埋葬が行なわれたと推定される地域であるが、今回の調査によ

って、その中心と見られた「大石」の存在する住宅地一帯は、弥生時代以降のある時期に、人為的に地形の著しい変更を受けたことが推定された。西南地区において本来の地形が保たれているのは北側の台地面（畑）（標高22m～20m）と遺跡を貫ぬく道路の南側の台地面（標高20m）であって、その間にある住宅地は2～3mの深さに掘り下げられて宅地化されたものと思われる。

「大石」は土地の掘り下げが行なわれた時点で元の位置から動かされ、本来二ヶ所にあったものが一ヶ所に集められて現在に至ったものであろう。

南側台地Bトレンチの土壌より出土した土器を復元した結果、2個の甕を得、合口甕棺であったことが判明した。しかし2個ともに縦に半分に裁ち切られており、出土状況とも照合すると、この合口甕棺は2回の被害を受けたものと思われ、第1回は甕棺の上面半分を削り取られ、第2回目には残存部分を掘り上げられ、別に土壌を新しく設けて埋め戻されたものと推定される。

今回の調査では確実な埋葬遺構を得るに至らなかったが、二拾数年前に土壌を有する巨石が存在したと、第一次調査の際に東北地区南斜面より須玖式及び三津永田Ⅲ式の甕棺破片の出土を見た

ことなどの事項を考慮すると、入来遺跡の西南地区に北九州型の甕棺葬と支石墓の存在したことは十分に推定できる。その時期は弥生時代中期後葉より後期前葉に渡るものである。

石塚遺跡の子産石は、元位置の調査結果によると、巨石の元位置には土壌などの遺構は検出できなかった。付近が弥生時代終末期の遺跡地である点はたしかであるが巨石との関係は不明である。今後の調査に待ちたい。本調査は文部省科学研究費による研究の一部である。

(河 口 貞 徳)



遺跡遠景



Cトレンチ発掘状況



入来遺跡「大石」



上石除去の状況



大石除去の状況

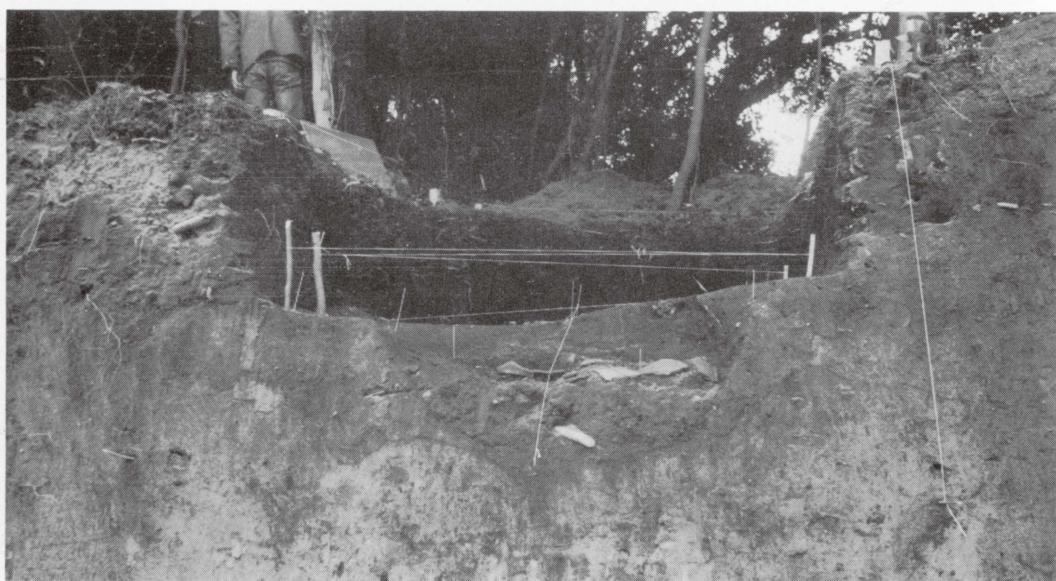


大石下のたゞき石、凹石等除去の状況

図版 4



防火水槽南崖面にあらわれた土掘断面



Bトレンチ（土掘）発掘状況